

政治への胎動

三年余りも秘書官稼業をやってきた私は、どうも事務官の仕事が最早肌に合わないような気がしてならなかった。人間というものは誰でも自分の境涯に満足とまで行かないまでも、或る種の諦めによって現在の境涯を肯定しがちなものだ。だから秘書官という政務官の仕事から正常事務官の仕事に帰って行つたとしても、事務官は事務官として何とかその中によさを見出してやつて行けるに違いない。そうも考え直してみたが、私の場合は素直に事務に帰って行く気がしなかった。それというのも、男として何か自分の活力を十分生かしきるような破天荒の冒險がしてみたかった。現状に対する倦怠感を打破して、自分の生命を思う存分燃焼させてみたかった。そういう衝動がどうも秘書官を辞めた私をして、正常な事務の領域に復帰せしめなかつた一つの素因であつた。

又反面、自分の後半生の行き方についてつくづくと考えてみた。元來、行政官というものは上りが早いものである。どんなに永く勤めてみても五十歳で行政官をやるといふことは、日本

においては稀有の例である。どうせ中途半端で再び娑婆に投げ出されるに違いない。それも戦時中のように政府や官僚の勢力が強い場合においては、退官後その余勢を駆って何かの仕事に天降りがきくのが例であった。しかし今日の時勢では世の中は官僚に対してそう甘くはない。何時の日か自らの力で自らの運命を切り拓いて行かなければならなくなる。そうした場合、自分としてどういふ分野に後半生を託するかにについては、考えざるを得なかったのである。

ところが実業につくといつてもこれには殆んど自信がもてない。省議に参列する大蔵省の次官や局長連中の顔をつくづく眺めてみても、今この人達が官職を離れて裸で銀座の街頭に抛り出されたとしたら、果してこの中何人が自らの力でその生活の道を開拓して行けるだろうかと考えてみると、どうもこの人こそは自活できるに違いないといって折り紙をつけられそうな人は殆んどいない。文筆人として立派にやっけて行けそうな人はないでもなかった。前の大蔵次官長沼弘毅さんなどはたしかにその稀有の例であったが、誰もそういう天分に恵まれているものではない。況んや私ごときものでは到底齒が立つ仕事ではなかった。といって僅かの恩給を頼りに隠棲する程の世捨人になるにはまだ血の気があり過ぎる。そういった事情が私を政界に

進出させるもう一つの素因をなしていたといえよう。

然らば政界に出るといふことはどうであるう。それも一つの道には違いない。それにしても第一政治という仕事ほど激しくけわしい仕事はない。それはきびしい日常の闘争を意味する。細い綱の上を渡るような仕事である。薄氷を踏むような芸当である。ほめられるよりは悪口をいわれることが多い。家庭を犠牲にする覚悟がなければならぬ。悪口を叩かれ頭を万人に下げながら渡世することは決して算盤に合う仕事ではない。それに選挙という困難で金のかかる関門を、しょっちゅうくぐらなければならぬことは、何としてもおっくうなことである。それも大臣というような栄職を近い将来約束されているのであつたら、人によっては、その困難も敢て忍ぶこともできようが、これこそ政治家にとっては正に狭い門である。こう考えてみると、政治家というのは跳びつく程よい仕事でない許りか、思慮深く自分の分限をよくわきまえた人であれば決してこれを選ぶに潔しとしない仕事である。自分の性格を分析してみても在来の政党政治家のようなコースを踏む自信が果してあるかどうかと反省してみるが、どうも確たる自信がもてそうもなかった。

とは言うものの、政治という職業は人間社会における最も本源的なものである。人間は政治

的動物だと言われている。凡てのこの始めに政治があり、凡ての社会的営為を貫いて政治があるのである。従つて又政治家という公職はなければならぬし、誰かがこれをお引受けしてやつて行かなければならないことも判りきつたことである。そして今日、政治家の職業は王者や一部の貴族の特権ではなく、万人に開放された公職となつてゐる。それは厄介で困難で割に合わないものだから、誰も政治家にならないのだということになれば、それは大変なことである。といつて身の程を省みないで無闇に政治家になりたい野心家計りが出てきて、これは国民にとつてまことに迷惑である。そこでふり返つて一体、在來の政治家と自分とを較べてみて、自分が果して彼等と同等或いはそれ以上の仕事をやつて行けるかどうかを考えてみると、手前味噌かも知れないが、その位のことにはやつてやれないというわけのものではない、というほのかな自負心が湧かないこともなかつた。

それに大きく言えば、われわれがこの国に生を享けてからの日本の国運というものをふり返つてみると、善きにつけ悪しきにつけ、一切の事態の経過は、つまるところ政治の責任に帰するといふことが言える。政治がしっかり大地に足をつけて公正妥当な大道を中外にわたつて踏み外すことがなければ、こうした国家の悲運と民族の悲劇を招くことはなかつた筈だといふこ

とは確かに言えることである。政治家が私利と私慾に走らないで、天下のことを第一に考え、護身に憂身をやつさず、に勇氣を以て言動するだけの用意があつたならば、国家の危局を回避し、民族の窮乏を救うことができたであろう。今日は又明治維新以上の変革期であるのだから、これからの国政のかじのとり方というものは、国家の運命にとつて重大な關係があることは否めないところである。今日のように政治という職業が大切である時代は滅多にないと言える。政治家の責任が今日ほど重い時代はないとも言える。一身を政界の激流に棹さして、己が生命を燃焼しつくすことは正に男子の本懐であろう。

そのようなことを彼は考え廻らしている間に、月日は遠慮なく経過していつて、何とか決断をつけねばならない破目に追込まれて行つた。ところが偶々昭和二十六年八月、私は池田大蔵大臣の配慮で三カ月ほど米国に出張することになった。池田さんとしては、自分の身边に私がないことによる不便を忍んで、極力私に外遊を勧めてくれ自らその手配をとってくれた。唯彼は私にどうして外遊させようとするのか、つまりその目的については一向に明かさなかつた。「講和会議もあり、いい機会だから行つておいで」と言われただけである。「何時立つのですか」と聞きただせば、「これから一週間もすれば立つてはどうか」と言われた。そこで私は急いで旅

装を整えて、八月十三日羽田空港を立て渡米したのである。十月下旬に帰国してみたら、当の池田さんは、「もうこれから大蔵省の方の仕事は心配しないでよいから、できるだけ郷里に帰って、郷里の人々と顔馴染になるんだ。何時、衆議院は解散になるか判らんよ」と念を押された。そこで私は、始めて池田さんが私を渡米させた真意をよみとることができた。当初、池田さんは「君は政治家になつてはいけない。君のような型の人物は官界に乏しいのだから、自分としては君が大蔵省に残ってくれることを希望する。絶対に政界進出などを考えてはいけない」とよく言いふくめられていた。私は彼のこの豹変に驚いた。

代議士当選と同時に大蔵大臣となつた池田さんは、もともと政界の事情に暗かつたし、後身に政治をやらせたい等ということは考えなかつたらしい。ところが激しい政界に身を置いてみると、官僚的な肌合では政界渡世ができるものではないし、親身になつてくれる同僚共苦の政友がほしくなつてきたのではなからうかと思われる。こういうことが直接の機縁になつて、私はとうとう政界進出を決心したのである。私の同僚秘書官の黒金泰美君や宮沢喜一君等の政界進出も、これと同巧異曲の経過を辿つてからのことであつたらうと思ふ。